

(史料紹介)

新出『金勝山浄厳院旧記写』について(上)

伊藤 真昭

織田信長の命で、浄土宗と法華宗が対論した「安土宗論」の現場となった浄厳院(滋賀県近江八幡市安土町)は、当時の本堂・本尊が現在でも残っており、その場にいと当時の熱気が蘇ってくるようだ。その浄厳院は、これまた織田信長の命で金勝寺谷の山中から強制的に移転させられた。安土へ移転する前は、「浄厳坊」であり、その開山は隆堯法印(一三六九―一四四九)という天台僧であった。寛政六年(一七九四)、阿弥陀寺住職の信岡によって著述された『湖東三僧伝』<sup>1)</sup>によると、隆堯は浄華院の実質的開山である向阿証賢の『三部仮名鈔』に感銘し、当時の浄華院住職定玄に師事し、応永十一年(一四〇四)、同国金勝山金勝寺域に遁世した。この草庵が浄厳坊である。隆堯は隠遁したとはいえ、精力的に『称名念仏奇特現証集』など自身の著作や法然、聖光、然空、向阿などの法語を抄出するなどして念仏弘通に努めた。

浄厳坊時代の様子をうかがえる史料としては、先述の『湖東三僧伝』が挙げられる。それによれば、第三代厳誉宗真は、近江守護六角高頼の帰依を受け、新たな精舎の建設を勧められ、隆堯の草庵のあった東坂の庵を阿弥陀寺とし、この地で不断念仏・六時常行および隆堯の開山忌を創始したという。やがてここを本拠に「浄厳宗」なる小教団ができ「門弟千余・子院六宇・属院数百」に及んだとある。ここから、伊藤唯眞氏はこの本末圏を「阿弥陀寺

本末圈」と呼び、中井真孝氏は「浄厳宗の中核は浄厳坊と阿弥陀寺の両寺にあったという実態から「浄厳坊・阿弥陀寺本末圈」と呼ぶのが妥当であろう」とする<sup>(3)</sup>。さらに南尊融氏は『湖東三僧伝』の記載内容は、浄厳院の末寺となっている阿弥陀寺が、その地位を上昇させるため、末寺であった事実を隠し、「両本寺」つまり対等な関係であったという由緒に改竄したとして、「浄厳坊本末圈」と呼んでいる<sup>(4)</sup>。

南氏のいうように『湖東三僧伝』の内容が事実を伝えていないということであれば、その信頼性が揺らぎ、依拠する史料を他に求めなければならない。そのひとつは最近『知恩院史料集 近世文書編 一』<sup>(5)</sup>として刊行された知恩院に残された文書類である。これは寛永五年（一六二八）から十三年にかけて浄厳院と阿弥陀寺の本末争いに関して知恩院に提出された史料である。その中に写しではあるが、浄厳坊時代の文書がある。これまでも中井氏の論考で一部紹介されていたが、その全体が明らかになった。

また浄厳院に残された史料群は、滋賀県教育委員会が古文書調査を実施し、また安土町教育委員会がその他の美術工芸品も含めた総合調査を実施し、それぞれ報告書が刊行されている<sup>(6)</sup>。その中に何点か浄厳坊時代のものが含まれる。一方で阿弥陀寺に残された史料は、明治二十八年に火災に遭ったこともあって、ほとんど残されていない。一点だけ厳誉宗真に宛てた知恩院住職周誉周琳の書状があり、これについては伊藤唯眞氏の研究がある<sup>(7)</sup>。

こうしてわずかずつではあるが、浄厳坊に関する同時代史料が発掘されているが、一次史料の絶対量は少なく、どうしても写しなどの二次史料に頼らざるを得ないのも確かである。特に「浄厳坊本末圈」の末寺を対象とした「宗牀諸末寺法度之事」と題する定書は重要な史料であるのに、どちらも戦前に刊行された、昭和三年刊行の『滋賀県史』<sup>(8)</sup>と昭和十二年刊行の藤本了泰氏の論考<sup>(9)</sup>にしか翻刻されていない。前者には「浄厳院文書」「以上一卷」と記載されており、その時点で浄厳院に卷子装の状態で存在したことがわかる。後者には「江州金勝阿弥陀寺浄土宗末寺

法度書」と題して掲載されている。所蔵情報がないため、どこを何を参照したのかは不明である。全文掲載はこの二点であるが、『滋賀県史』が参照したはずの原史料は、現在浄厳院には存在しない。さらに両者の内容は一致せず、また誤植もあるために、伊藤唯眞氏は、藤本翻刻本を参照しつつ、滋賀県史本に拠って論を進めている<sup>⑩</sup>。とはいえそれが正確かどうかは、原本がないので確かめようがない。

またこの史料を指して「阿弥陀寺清規」と呼ばれることがあるが、その典拠は『湖東三僧伝』である。同書には「阿弥陀寺清規」の全文ではなく抄出であるうえ、内容も要約されている。また南氏の研究を参照すると、この名称も不適切となる。今後は原本にあったと思われる表題「宗牀諸末寺法度」と呼ぶのが適切であろう。

そのような状況の中、今回本稿で紹介する史料ができた。これは佛教大学本庄良文先生が古書店で購入され、筆者に情報提供いただいたものである。本紙七十六丁で表紙には「金勝山浄厳院旧記写」とあり、一見して安土浄厳院に係る史料だとわかる。また元禄三年（一六九〇）十二月十二日の日付と「法譽代」と書かれている。法譽とは浄厳院第十三代住職のことである。さらに延享三年（一七四六）に誠譽が修復したことも書かれてるが、誠譽とは第十八代住職誠譽玄実（一七四一―一七八在任）のことである<sup>⑪</sup>。したがってこれは浄厳院で作成されたものとわかる。作成年代は元禄三年であるが、どこかの時点で校訂が施されており、誤字は訂正され、補足情報は行間に注記されている。

その内容は一丁目に目次があり、それを見ると、冒頭一・二に歴代住職の履歴、三で原本不明の「宗牀諸末寺法度」がある。現在のところこれが現存最古の写本である。四・五は寛永年間の相論に関する史料がまとめられている。六・七は相論に関連して浄厳坊時代の古文書の写しを書き留められた。

本稿では主として金勝山にあった浄厳坊に関する資料を中心に影印を付し、目次番号一―七を翻刻する。最後に

浄嚴坊時代のものとして推定される「別時法度之事」（浄嚴院蔵）を付録として合わせて掲載する。これらの翻刻によって今後の浄嚴坊研究の一助になれば幸いである。

【凡例】

- 一 文中に適宜句読点・並列点を付す。
- 一 原文は常用漢字を基本とし、異体字・俗字・旧字などは一部を除き基本的に常用漢字に改めた。
- 一 虫食いなど文字欠けは、一文字の場合は□、複数文字の場合は「 」と表記する。
- 一 丁替わりには、カギ括弧（ ）で最終文字を示し、その後に1丁目表は（1オ）、1丁目裏は（1オ）と表記した。
- 一 傍注は丸括弧で本文の右傍に表示した。
- 一 本文中にはないが、理解を助けるために、該当場所に目次の表題を隅付き括弧（ ）で表示した。
- 一 『知恩院史料 近世文書篇』で翻刻済みのものには該当史料番号を末尾に付す。
- 一 史料に通し番号を付し、太字で〔史料①〕というように表記した。

【解題】

〔史料①〕・〔史料②〕

浄嚴院の歴代を事績とともに列記する。特に初代隆堯については、『湖東三僧伝』とは異なり、向阿はもとより、『三部仮名抄』も含め浄華院に関する一切言及されず、隆堯は知恩院の法阿に帰依し浄土門に入ったことになっている。



歴代について史料①は九代目の麿萱了念まで、史料②は一〇代目の広誉鉄牛まで記している。

### 〔史料③〕・〔史料④〕

中世近江浄土宗教団の本寺である浄嚴坊が末寺に対して制定した「宗牒諸末寺法度」の現存最古の写本。冒頭に「浄嚴坊三代宗真上人自筆」とあることから、宗真自筆原本を写したと思われる。ただし滋賀県史本同様、明応元年九月という日付はない。滋賀県史本と文字を比較してみると、カタカナか、ひらがなか漢字かの違いはあるが、内容に大きな差異はない。ただこの写本によって滋賀県史本の誤植が判明するので、滋賀県史本と明らかに違う部分はゴシックにした。逆に一部こちらの脱漏一部分も明らかになる。その部分は亀甲括弧で補っている。

内容で興味深いのは、「宗牒諸末寺法度」第三六条で「近年末寺同衆僧おほくなり候」と浄嚴坊末寺が増加している様子がうかがえるのと、「庫裏法度」第五条で「小僧は幼くても叢林（禪宗）のように贅沢せず、無駄に遊び狂ってはいけない」と戒めていることである。この時期には、三河大樹寺でも開山勢誓愚底が寺内法度である「式定」を定めている。両史料を詳細に読み込むことで、中世近江浄土宗教団の特質が浮かび上がるのではないかと考える。なお「宗牒諸末寺法度」と「庫裏法度」を合わせると四十八ヶ条となる。四十八という条数から、この二つの法度は一体のものと考ええる必要がある。

### 〔史料⑤〕

寛永年間に発生した阿弥陀寺との本末争いに関係するもの。現在地恩院には双方で作成された文書が文書群として保存されていて、それらは『知恩院史料 近世文書篇』として刊行されているが、この日付のものは見当たらない。

内容は阿弥陀寺側が阿弥陀寺と浄厳院は「両本寺」として対等の関係にあると主張するのに対し、浄厳院側は当然それを否定するのであるが、過去の経緯に触れる中で、浄厳坊時代の様子がうかがえる史料である。

〔史料⑥〕

浄厳院末寺であったが、離脱して知恩寺末となった水口真光寺の離脱経緯について述べたもの。真光寺は心光寺として現在も水口に存在する。真光寺が離脱するのと阿弥陀寺が離脱するのではその影響力は計り知れなく大きい。ため、浄厳院側はなんとしてでも離脱を阻止しなければならなかった。

〔史料⑦〕・〔史料⑧〕・〔史料⑨〕

いずれも『知恩院史料 近世文書篇一』に収録されている。阿弥陀寺が他の末寺と同様に「組頭」として署判していることから、「両本寺」ではないことを証明する文書。「御本紙有」とあることから浄厳院に原本があったようだが、現在は確認できない。

〔史料⑩〕・〔史料⑪〕・〔史料⑫〕

この三点の文書は、いずれも阿弥陀寺に原本があったようだが、これも現存しない。一つめは阿弥陀寺の開基厳誉宗真と始世の住持真誉浄阿が連名で下した法度である。つまり浄阿が実質の開基で、宗真は名目的開基だといえよう。これまで『湖東三僧伝』の記述から宗真が阿弥陀寺を開いたとされていたが、真誉浄阿という僧が宗真を開基に迎えて開いたのではないだろうか。ここでの宗真の立場は本寺浄厳坊住職としての署判であろう。明応元年九

月七日時点で「法度四十八箇条」、つまり「宗躰諸末寺法度」が出されていたことがわかる。

二つめは永正十五年（一五一八）に示寂する宗真の讓狀である。一行目に「此兩人」とあるが人名は臨西坊しかないもので、前欠と思われる。第二条では宗真の中陰は阿弥陀寺で阿弥陀寺と浄嚴坊の僧侶だけで勤めること、また「谷」、つまり浄嚴坊を相続する宗珠坊には、東坂阿弥陀寺と万事相談して「宗躰諸末寺法度」以下を徹底することを求めている。この史料はたしかに阿弥陀寺が主張する「両本寺」を示しているといえよう。

三つめは、安土に浄嚴坊を移した応譽明感が、浄嚴坊の跡地の掃除を然譽にさせることにしたが、阿弥陀寺はそれから除外することに合意した、このことは然譽にもちゃんと伝えている、と阿弥陀寺に通達している。応譽は阿弥陀寺を特別扱いしているようにもみえる。

なお、これまで浄嚴坊の安土移転の年代ははっきりしていなかったが、天正五年二月の段階で「遺跡」のことが話題になっている。信長が十月十日に「こんせの坊主」に移転を強制した朱印状を出しているが、それは天正四年と確定できる。これを請けて翌天正五年に移転したのである。本史料でも安土移転を天正五年としている。

### 〔付録〕

別時念仏を行う際の決まり事を記したものの<sup>13</sup>。これによると、別時念仏の際には調声人がいて、鉦鼓や脇金といった鳴り物が用いられていたことがわかる。また道場に入る前には手洗いや口の中を漱いで身を浄めていたり、持ち物の取り違いや落とし物に関する規定など興味深い内容がある。時期は不明であるが、「指当」という語句使用の類似性、文字の雰囲気、衆議で決していることなどから、「宗躰諸末寺法度」と同時期と考えても差し支えない。

(表紙) (28・9<sup>ナセシ</sup>×20・3<sup>ナセシ</sup>)

「元禄三<sup>庚午</sup>歲十二月十二日、法譽代也

延享三寅年 誠譽修飾之

## 金勝山淨嚴院旧記写」

- 一 知恩院<sup>(十七代法阿)</sup>十六代清阿上人<sup>江隆</sup>薨依之事
- 二 淨嚴院代之事
- 三 淨嚴院諸末寺法度文事、但淨嚴坊三代宗真上人自筆之事
- 四 阿弥陀寺新儀を申二付、淨嚴院ヨリ覚書
- 五 甲賀水口真光寺事
- 六 淨嚴院組頭衆加判証文三通有事
- 七 阿弥陀寺より兩本寺之証文ト申ス書物三通事」(1才)
- 八 正覺院弘誓寺出入門徒中より出状之事
- 九 正覺院住持自筆以門徒中へ挙ケ申目安之事
- 十 弘誓寺門中へ挙ケ申目安之事
- 十一 寛永十五年十二月廿二日<sup>(政)</sup>ニ預御裁許ニ候上ニ、為後証墨付被成御取之事
- 十二 正覺院儀ニ付、小堀遠江守殿へ挙ケ申目安之事
- 十三 正覺院代々住持職本寺之四十八日ニ詰申事

(後筆)

「十四 小堀権左衛門殿<sup>江</sup>深誉指出候書翰

十五 寛永六己巳三月法事導師之事

十六 寛永十一五月六日阿弥陀寺寂譽、同寺中御本山江指上候言上書

十七 正覺院一、但重書坎

十八 阿弥陀寺寂譽御本山江歎訴候書翰

十九 本山ヨリ本末江被成下候ケ条

廿 演譽追放被仰付候節之五科

「(1ウ)

【一知恩院十六代清阿上人江隆堯帰依之事】

【史料①】

一 淨嚴院開山隆堯法印、応永十一年、生年三拾六歳ニ而被成頓世、江州栗本郡金勝寺之谷ニ草案結、自行化他

之ために念仏三昧を行、知恩院十六代之法阿上人江帰依シ、浄土之安心を聴、経論祖釈之中ニモ集元祖上人之御

法語之肝要ヲ、記一卷之抄、念仏安心大要拔書。此板木知恩院有之。則大要奥書ニ白文字ニヲコシテアリ。其上

隆堯之御直弟、浄嚴坊二代堯隆阿上人者知恩院十八代ナリ。開山より知恩院ハ帰依如此。浄嚴坊三代嚴誉宗

真上人ハ隆阿上人之弟子、四代ハ映誉宗玖上人、五代ハ「(2オ) 忍誉真源上人、六代ハ仙誉珠慶上人、忍誉上人

之直弟也。七代ハ九誉源慶上人、往生之刻永禄九年ニ知恩院様江谷之坊より住持乞申候時、法誉上人様被成御馳

走、当院八代目明感上人を浄嚴坊住持職ニ被仰付候。天正十年八月廿七日ニ応誉往生之砌、法誉様御焼香ニ浄嚴

院へ御下向被成候。次ニ住持乞申時、和州浄国寺信誉任誓上人ヲ被成御馳走、住持職ニ被仰付候。出入五年御座

候而御退席被成御帰候。次ニ住持乞申時、山田ノ源福寺を被成御下シ、一春御座候。彼岸過候へは、被成御帰候。

天正十五年十一月十二日結願導師寂誉下へ房州長泉寺八幡山ニ住居候○廣長江洪○造誉様御折紙被下、当院へ住職被仰付候。

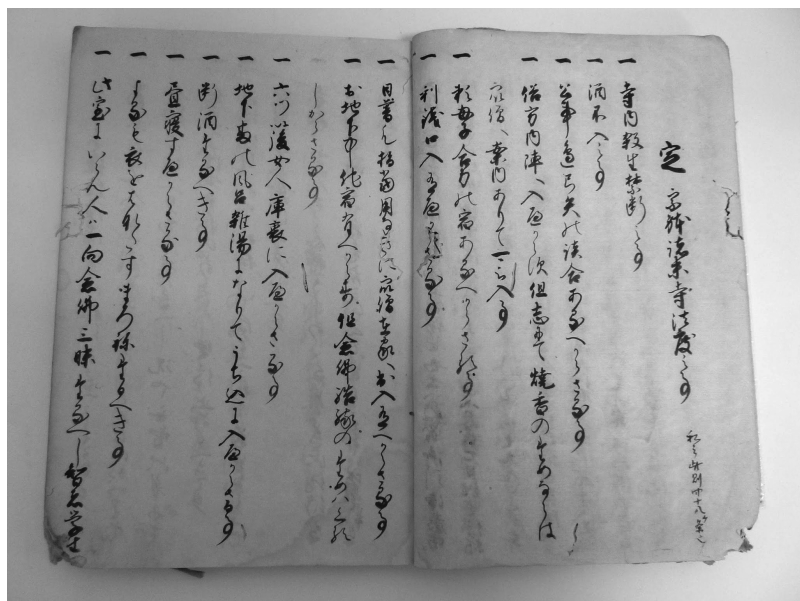
「——應誉了念上人也。文禄中・慶長曆中ハ広誉上人。元和始元年ヨリ寛永・正保迄深誉

天正十九年二入院被申候。先規より当院代々知恩院<sup>江</sup>年頭申上候。ケ様之式次第、彼衆不存、白旗流儀にてハ無御座候と申、我儘を申候。

# 【一浄厳院代之事】

## 〔史料②〕

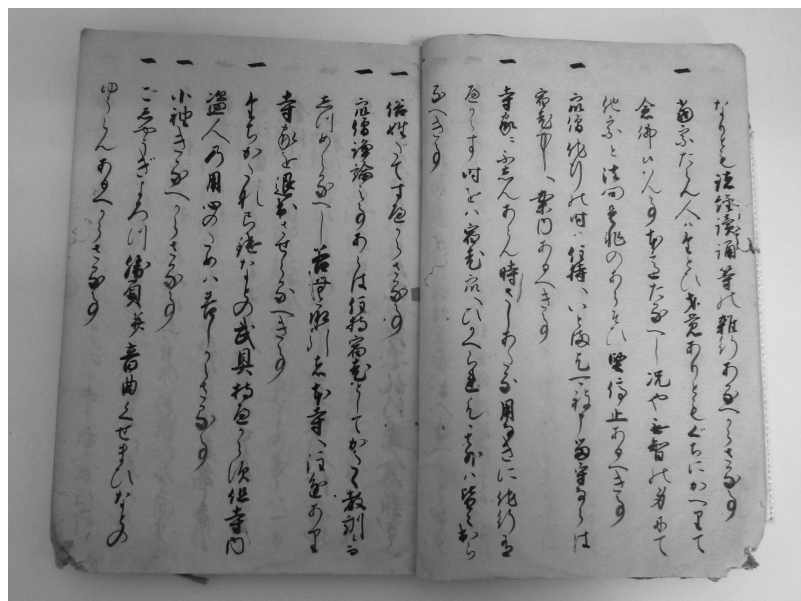
一 浄厳院開山隆堯法印、応永十一年二頓世、宝徳元年十二月十二日二生年八拾一遷化。谷之坊二四十六年之住。生国ハ江州川辺<sup>ツラ</sup>ノ郷。浄厳坊二代堯譽隆阿上人、宝徳二年ヨリ住持職。文明十三年九月七日二往生。<sup>○此内二本山住有之。</sup>三拾貳年之住。生国ハ江州野洲郡小浜村。浄厳坊三代厳譽宗真上人、文明十三<sup>(致)</sup>年住持職。永正十五年十二月廿九日二往生。三拾八年住。生国ハ丹後。浄厳坊四代映譽宗珍<sup>(致)</sup>上人、永正十六卯年二入院。大永五年九月十八日往生。七年住持職。生国者伊勢山田也。浄厳坊五代忍譽真源上人、大永五酉年二入院。天文五年八月十二日二往生。住持職十二年。江州弓削。浄厳坊六代仙譽珠慶<sup>正覚院二代仙譽珠慶——廿二改元</sup>天文五年二入院。同式拾三年十月五日往生。十九年住持職。生国江州鵜川。浄厳坊七代九譽源慶上人、天文二十三年二入院。永禄八年十一月廿六日往生。拾貳年住持職。生国ハ上野。浄厳坊八代応譽明感上人、永禄九寅年二浄厳坊へ<sup>在命六年</sup>（3ウ）入院。<sup>十二年之後</sup>天正五年信長様浄厳坊を安土へ被成御引、浄厳坊ヲ院二被成候。此故二浄厳院八代也。<sup>廿九年也</sup>天正十年八月廿七日往生。住持職十八年。生国ハ伊勢山田。天正十年ヨリ同十九年迄九年之間、信譽任誓上人・叡譽俊洞上人兩人住持職也。当院二而往生なき故二代々式人不入。浄厳院九代麿譽了念上人天正十九年二入院。慶長三年二月十日二往生。九年住持職。生国者房州。浄厳院十代広譽鉄牛上人、慶長三年二入院。元和元年二隱居<sup>金勝阿弥院寺</sup>。十八年住持職。但往生ハ元和七年二月八日。生国者江州矢橋也。」（4才）



【三 浄厳院諸末寺法度文事 但浄厳坊三代宗真上人自筆之事】  
〔史料③〕

定 宗鉢諸末寺法度之事 私云、此則四十八ヶ条也。

- 一 寺内殺生禁断之事。
- 一 酒不入之事。
- 一 公事辺弓矢の談合あるへからさる事。
- 一 俗方内陣へ入へからす。但志にて焼香のためならば、衆僧へ案内ありて可被入事。
- 一 頼母子・合力の宿あるへからさる事。
- 一 利銭口入有へからさる事。」(4ウ)
- 一 日暮候て指当用なきに、衆僧在家へ出入有へからさる事。
- 一 於地下中、他宿有へからす。但念仏結縁のためハ、くるしからさる事。
- 一 六ツ以後、女人庫裏に入へからさる事。
- 一 地下番の風呂、雑湯になりて、うち込に入へからさる事。
- 一 断酒たるへき事。
- 一 昼寝すへからさる事。
- 一 (夜)よるも衣をはなたす、(丸寝)まろねたるへき事。



「此室にいらん人ハ、一向念仏三昧たるへし。智者・学生」

(5才)なりとも、諸経読誦等の雜行あるへからざる事。

一 当宗たらん人ハ、たとひ才覚ありとも、ぐちにかへり

て念仏候はん事、本意たるへし。況や無智の身にて他

宗と法問是非のあらそひ堅停止あるへき事。

一 衆僧他行の時ハ、住持へいとま乞可被申。留守ならば

宿老中へ案内あるへき事。

一 寺家ニふしんあらん時、さしあたる用なきに他行有へ

からず。時をハ宿老衆へひかれ候て、其外ハ皆々

出らるへき事。」(5ウ)

一 俗姓だてするへからざる事。

一 衆僧諍論之事あらは、住持・宿老として、かたく教訓

候而しつめらるへし。若無承引者本寺へ注進あり、寺

家を退出させらるへき事。

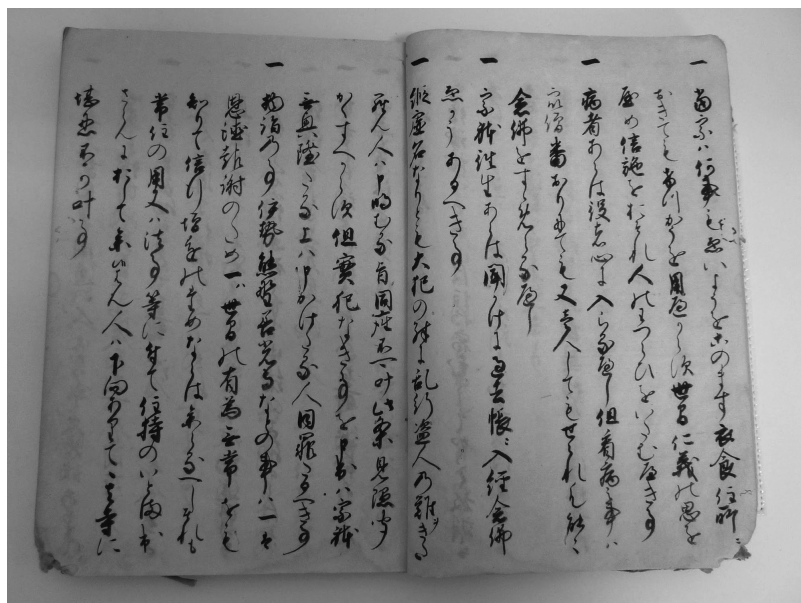
一 たち・かたな・弓・鎧などの武器持へからず。但

寺内盗人の用心のためハ苦しからざる事。

一 小袖きるへからざる事。

一 二・しやうぎ、よろつ勝負并音曲・くせまひなどの





新出『金勝山浄厳院旧記写』について（上）

（遊覧）  
 ゆうらんあるへからさる事。」（6才）

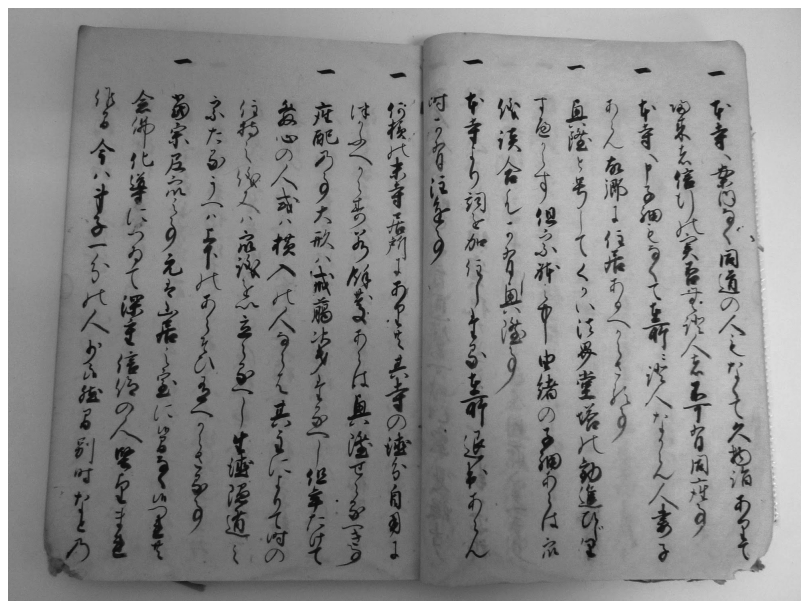
一 当宗ハ何事もえいようをこのます、衣・食・住所ニおきても、けつかう（結構）を用へからす。世間仁義の思をやめ、信施をおそれ、人のわつらひをいたむへき事。

一 病者あらは、役者心に入れらるへし。但看病之事ハ衆僧番おりにても、又壺人してもせられ候て、能々念仏を（勤）す、めらるへし。

一 宗牀往生あらは、聞かけに過去帳二入、経・念仏・（回向）系かうあるへき事。

一 縦虚名なりとも、大犯の「三ヶ条」、殊に乱行・盗人の難ヲきた」（6ウ）らん人ハ、申明むる旨（なくは）同座不可叶。此条見隠・聞かくす（隠）へからす。但実犯なき事を申出ハ、宗牀無興隆たる上ハ、申かけたる人同罪たるへき事。

一 物詣の事、伊勢・熊野・善光寺などの事ハ、一は恩徳報謝のため、一ハ世間の有為無常をも知りて信行増進のためならは、参らるへし。それも常住の用、又ハ法事等に付て、住持のいとま出（暇）さらん（押）に、おして参候は



ん人ハ、下向ありて、其寺に堪忍不可叶事。」(7才)

一本寺へ案内なく同道の人もなくて久物詣ありて帰来者、  
信行の実否無証人者、不可有同座事。

一本寺へ申子細もなくて、在所二証人なからん人、妻子  
あらん故郷に住居あるへからさる事。

一興隆と号して、くかい・法界、堂塔の勧進ひじりすへ  
からす。但宗鉢之中由緒の子細あらは、衆儀談合候て、  
可有興隆事。

一本寺より詞を加、住したる在所退出あらん時、可有注  
進事。」(7ウ)

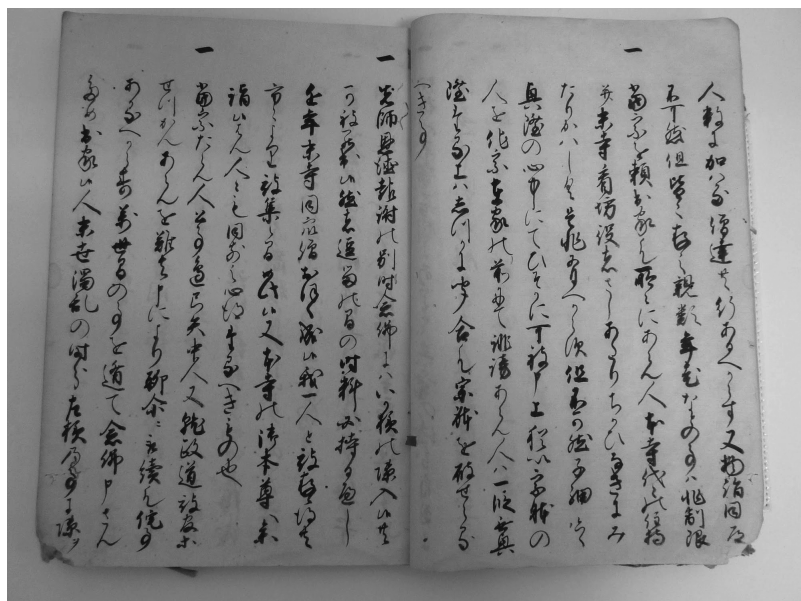
一何様の末寺、居所にあり共、其寺の徳分自用につかふ  
へからす。若余慶あらは興隆せらるへき事。

一座配の事、大形ハ戒臈次第たるへし。但年たけて発心  
の人、或ハ横入の人ならば、其主によりて、時の住持  
之儀、又ハ衆議を以立らるへし。生徳隱遁之宗たるう  
へハ、上下のあらそひ有へからさる事。

一当宗尼衆之事、元は山居之室に候間なく候つれ共、念  
仏化導につゐて、深重信仰の人、堅望まれ候間、今ハ

一当宗尼衆之事、元は山居之室に候間なく候つれ共、念  
仏化導につゐて、深重信仰の人、堅望まれ候間、今ハ

一当宗尼衆之事、元は山居之室に候間なく候つれ共、念  
仏化導につゐて、深重信仰の人、堅望まれ候間、今ハ

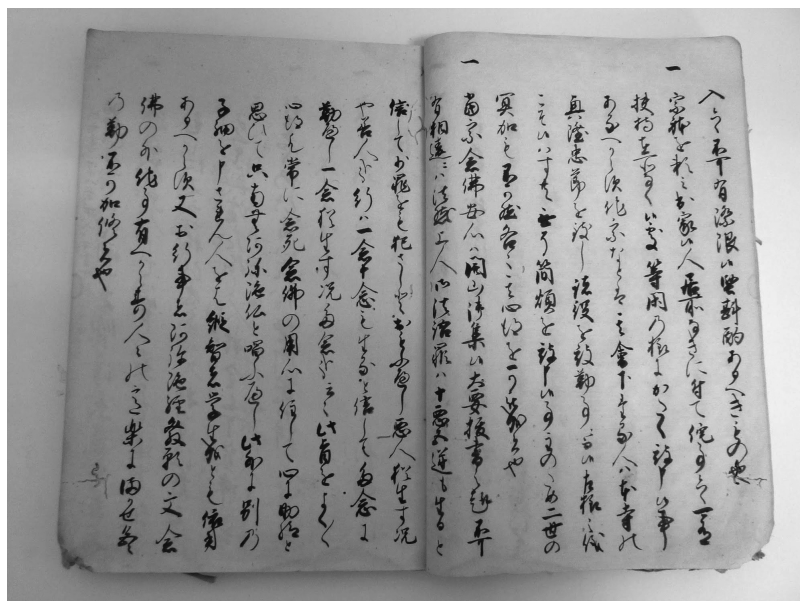


弟子一分の人少々候。然間別時などの」(8才)人数に加ハる僧達共、行あるへからす。又物詣同道不可然。但皆々存候親類・年老などの事ハ非制限。

一 当宗を頼出家候て所々にあらん人、本寺代々の住持并末寺看坊・役者、さしあたりちかひなきに、みたりかハしく是非有へからす。但不可然子細候ハ、興隆の心中にて、ひそかに可被申上。猶以宗牀の人を他宗在家の前にて誹謗あらん人ハ、一段無興隆たる上ハ、しつかに聞合候て、宗牀を破せらるへき事。」(8ウ)

一 先師恩徳報謝の別時念仏にハ、いか様の隙入候共可被罷出候。然者逗留の間の時料<sup>(金)</sup>必持るへし。近年末寺・同衆僧おほく成候。我等一人と被存候得共、方々より被集候間、如此候。又本寺の御本尊へ参詣候はん人々も同前之心得たるへきもの也。

一 当宗たらん人、公事辺・弓矢中人、又就政道、被官等<sup>(折檻)</sup>せつかんあらんを、難去申により、聊爾二取続候て、佗事あるへからす。万世間の事を遁て、念仏申さんため出家候人、末世濁乱の時分、左様の事に隙ヲ」(9才)

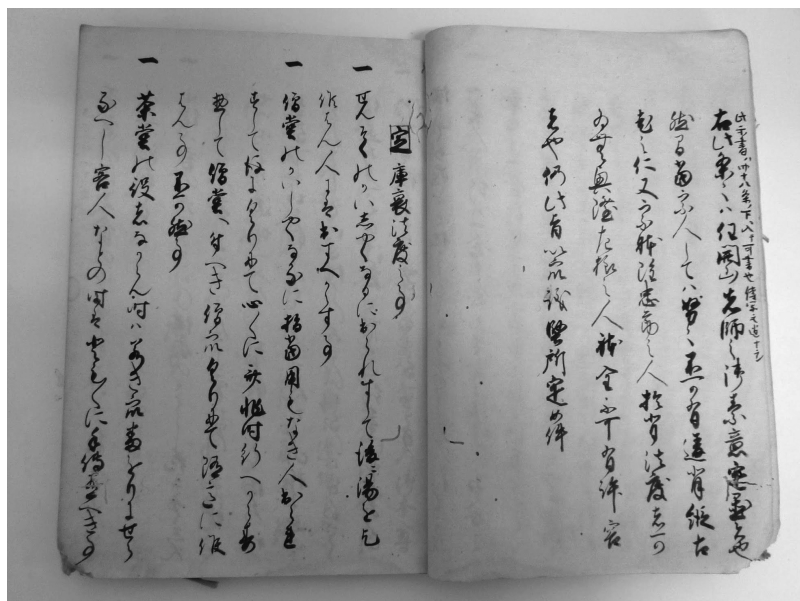


入候ハ、不可有際限候。堅斟酌あるべきもの也。

一 宗躰を頼ミ出家候人、居所なきに付て侘事候ハ、可有扶持在所なく候処、等閑の様にたたく被申候事あるへからす。他宗などは其会下たる人ハ、本寺の興隆・忠節を致し、諸役を被勤事ニ而候。左様之儀こそ候はす共、無了簡煩を被申候事、主のため二世の冥加も不可然。各々其心得を可被成者也。

一 当宗念仏安心ハ、開山御集候大要拔書之趣、不可有相違。〔殊〕二ハ、法然上人御法語、「罪八十惡五逆も生ると」(9ウ) 信して、少罪をも犯さしとおもふへし。

悪人猶生す、況や善人哉。行ハ一念十念も生ると信して、多念に勤へし。一念猶生す、況多念哉」云々。此旨をよく心得候て、常に念死念仏の用心に住して、心に助給と思ひて、只南無阿弥陀仏と唱ふへし。此外に別の子細を申されん人をは、縦智者・学生成とも依用あるへからす。又於行事者、阿弥陀經・發願の文・念仏の外、他事あるへからす。人々の意樂にまかせ、色々の勤不可加修者也。」(10オ)



此書ハ四十八条ノ下ニ入テ可書也。伝寫其趣ナラン  
右此条々ハ、任開山先師之御素意、定置者也。然間当  
宗人してハ、努々不可有違背。縦古老之仁、又宗躰雖  
忠節之人、於背法度者、可為無興隆。左様之人躰全不  
可有許容者也。仍此旨以衆議堅所定如件。」(10ウ)

〔史料④〕

〔定〕庫裏法度之事

一 せんそくのかいしやくなるに(洗足)出られすして、後二湯を  
乞候はん人(割笏)には出すへからす事。(鳴)

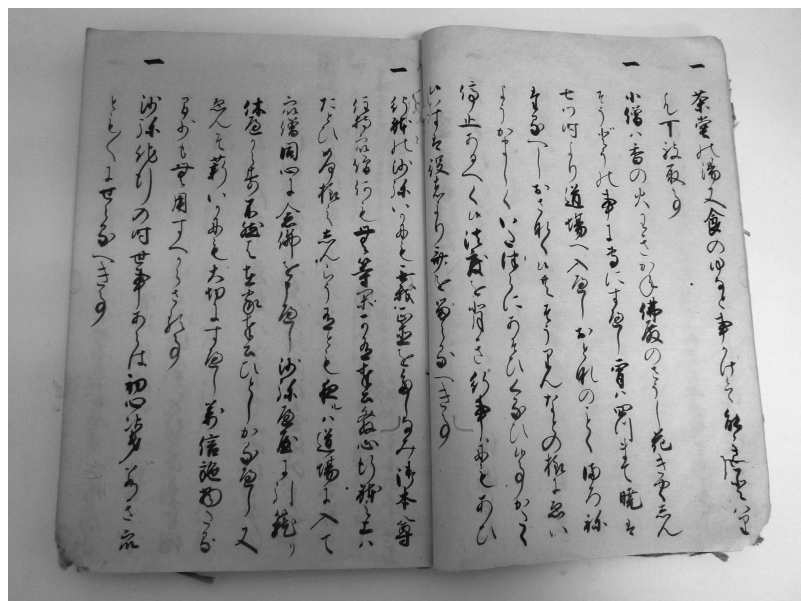
一 僧堂のかいしやくなるに、指当用もなき人出られすして、  
後にくりにて心く(庫裏)に肅・非時行へからす。惣して僧  
堂へ付へき僧衆、くりにて随意に候はん事不可然事。

一 茶堂の役者なからん時ハ、若き衆、番をりにせらるへし。  
客人などの時は、ともく(衆)に手伝有へき事。」(11オ)

一 茶堂の湯、みたりか(湯)はしく取つかふへからす。但か  
みの湯」又食のゆなと事かけ候ハ、能々ことハリ候  
て可被取事。

一 小僧ハ、香の火わき(脇金)かね、仏殿のさうし(掃除)・花・





(客人)・(僧堂)・(給仕)・(殊) きやくしん・そうどうの「きうし」事に専にすへし。

宵ハ四つまで、<sup>(丸寝)</sup> 暁は七つ時より道場へ入へし。おとなのこくとく、まろねたるへし。おさなく候共、<sup>(叢林)</sup> そうりん

などの様に、<sup>(榮耀)</sup> ゑいようかましく、いたつらにあそひく

るひ候事、かたく停止あるへく候。法度を背き、行事

にもあひ候ハすは、役者より斎を留らるへき事。」「(11

ウ)

一行鉢の沙弥、いかにも無我正直をたしなみ、御本尊・

住持・衆僧、何も無等閑可有奉公。発心行鉢之上ハ、

たとひ如何様之しんらう有とも、<sup>(辛勞)</sup> 夜ルハ道場に入て、

衆僧用心に念仏を申へし。沙弥へ<sup>(部)</sup> 屋に引籠り、休へ

からす。不然は在家奉公ひとしかるへし。又<sup>(塩増)</sup> んぞ・

薪いかにも大切にすへし。万信施物たる間、少も無用

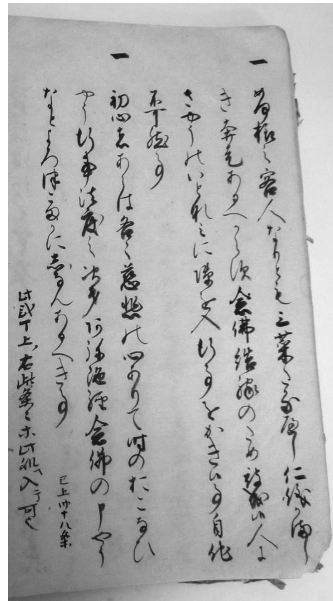
すへからさる事。

一 沙弥他行の時、世事あらは初心次第若き衆ともくにせ

らるへき事。」「(12才)

如何様之客人なりとも、三菜たるへし。仁儀かまし

き奔走あるへからす。念仏結縁のため被成候人に、



さやうのいとなミに隙を入、行事をかき候事、自他不可然事。

一 初心者あらは、各々慈悲の心ありて、時のおこなひやう、行事法度之次第、阿弥陀経・念仏の申やうなど、よろ

つこまかにしなんあるへき事。

已上四十八条

#### 【四】 阿弥陀寺新儀を申二付、浄厳院ヨリ覚書

#### 〔史料⑤〕

#### 条目

寛永十一年阿弥陀寺寂誓白旗派儀御改之加判違背二付、本山江頭上候本寺深誓之願書写

〔寂誓也〕

一 今度着帳加判之儀二付、阿弥陀寺不謂新儀ヲ被申懸候。浄厳院と阿弥陀寺ハ両本寺にて候間、諸末寺同前に着帳加判仕間敷候。両本寺ニ只今究候ハ、可致判形と被申候得共、先規より両本寺之儀終不承候。先年門中衆儀之判形御座候時ハ、阿弥陀寺も組頭並之判形にて御座候。只今新儀二両本寺と被申懸候事不能分別事。

一 阿弥陀寺ハ浄厳坊三代嚴誓宗真上人開基二而（13才）御座候。被成開基候子細ハ、金勝寺ハ女人結界之地、谷之坊ニ別時御座候も、男子迄参詣仕、女人不入之故ニ、男女参詣のために金勝寺より五拾町余口に一寺ヲ建立し給。則阿弥陀寺也。阿弥陀寺ハ本寺之旅所にて御座候。是故二本寺浄厳坊上人并寺僧下向候て、旅所にて開山忌

執行被申、男女二念仏結縁被仕候。開山忌之間万事入用本寺より賄申候。阿弥陀寺衆には少も構せ不申候。其外施主御座候て別時有之時ハ本寺之上人下向被仕、執行被申候。当院金勝寺ノ（13ウ）谷ニ有之間ハ、阿弥陀寺之儀ハ本寺之儘ニ而御座候故ニ、万事指引浄嚴坊より申候事。

一 信長様天正五年ニ金勝山之内谷ニ御座候本尊<sup>寺</sup>浄嚴坊を安土へ被成御引、浄嚴坊を院ニ被成候。則浄嚴院是也。爾ヨリ以来浄嚴院にて例年九月五日ヨリ開山忌執行仕候。是故ニ<sup>旅</sup>施所之阿弥陀寺九月五日より詰番にて御座候。于今無懈怠当院へ被致出仕、開山影前之被勤報謝事。

一 当院へ阿弥陀寺より年頭之式日、先規より正月（14才）三日ニ無懈怠急度持參候て、年頭被申候。本寺より返礼ニ者其座敷にて末広<sup>寺</sup>本・茶五袋遣申候。何も組頭寺々へ者如右之返礼ニ而御座候事。

一 諸末寺小僧・沙弥之法衣、本寺浄嚴院ニ而授り申候。阿弥<sup>陀</sup>寺内之小僧・沙弥も本寺当院ニ而法衣取現在帳へ入申候事。

一 諸末寺小僧・沙弥、五条・七条之出世、先規より本寺浄嚴院にて出世仕候。阿弥陀寺内小僧・沙弥も悉ク本寺浄嚴院にて致出世候。出世之香奠、五条者（14ウ）米貳斗、七条ハ米四斗、兩様六斗、是本寺之家督にて御座候事。

一 諸末寺不寄老若、往生仕候得者、袈裟・衣ニ香錢添り、本寺浄嚴院へあかり申候。阿弥陀寺住持并寺僧往生被仕候得者、袈裟・衣ニ香錢添り、急度本寺へ挙ケ申候。則年中諸末寺往生人を過去帳へ入、九月開山忌ニ誂挙、廻向仕候事。

一本寺谷之坊之御本尊阿弥陀寺ニ預置申候。天正五年ニ 信長様浄嚴坊を安土へ被成御引候時、客（15才）寮ニ当院より良恵と申仁を留守ニ申付置候。此人浄嚴院へ帰度と被申候時、本寺之寺僧宗永・宗寿・良印・永宣、此四人之指図にて御本尊を阿弥陀寺寺僧吉川・隆慶、此兩人ニ預ケ置被帰候得と被申付候故ニ、良恵使にて、右之兩人ニ預置申候。然るに預り被申候吉川・隆慶并使之良恵、又ハ本寺之<sup>寺</sup>兩僧四人、何も被相果候故ニ、押置当院



へ渡し不申候事。

此本尊之儀ハ、重而此方より吉川弟子宗清、隆慶弟子慶山兩人ニ師匠ヲ前書ニ入、誓紙可申付と存候。」(15ウ)  
一天正年中ニ阿弥陀寺不慮ニ煙焼仕、其後不取合、本堂建立被申候。庫裏、殊外不弁ニ罷成、常住統兼、迷惑被仕候付而、本寺より開山忌を申請、台<sup>⑦</sup>ニ仕、堂供養とて方々仏供・靈供を勸、四十八日別時執行仕候ハ、其外位牌・參錢も可有之候間、左様ニ候ハ、阿弥陀寺相続可致候。是非共四人之寺僧同心候て可給と様々被申付候而、無了簡昔之旅所にて候得者、自余之末寺ニ為違、阿弥陀寺ニて御座候故ニ、本寺より諸末寺組頭衆へ折紙遣候。然者阿弥陀寺別時中之役者本寺之」(16オ) 寺僧并同宿ニ被申付、僧堂之知客頭・内陣之灯明兩人・庫裏之知事迄悉淨嚴院指引仕候事。

一阿弥陀寺企邪義、四月廿日ニ栗本并甲賀両郡へ廻文を遣、手寄之坊主衆を呼寄せ、同廿二日ニ被申渡候。淨嚴院ハ知恩院を引請、不謂儀を申懸、小末寺同前ニ着帳加判と被申候。此度引割可申候両郡之宗躰衆ハ、阿弥陀寺へ可有隨着候。来ル九月には当寺にて開山忌執行可仕候。此等之趣檀那衆へ可有披露候。両郡之宗躰衆ハ、自今以後淨嚴院<sup>江</sup>」(16ウ) 堅不可有出仕候と申渡し候事。

一阿弥陀寺住持・同寺僧、不謂巧新儀、淨嚴院へ嘉例之年頭、又ハ例年開山忌、両度之不可致出仕との起請ニ邪義之企連判を、末寺を引割、本寺を忽ニ可成退轉仕立、迷惑ニ奉存候事。  
右之条々被聞召分、淨嚴院相続仕様ニ被仰付可被下候。已上。

寛永十一年四月廿八日

江州

淨嚴院

本山知恩院様

御役者中」(17オ)

【五】 甲賀水口真光寺事

〔史料⑥〕

水口真光寺從末寺ニ有之候得共、本寺広譽代離本之先例有之ト云。伏□難有之故爲通答已下を以被書上候もの也。

別条目

一 浄嚴院末寺甲賀郡水口真光寺儀、慶長十六年七月十八日ニ、（徳川家康 上様御相撲之衆美濃部助三郎ト申仁、但知行三百石取、死去被仕候砌、先住広譽（歿中）真光寺と法問出入御座候而、彼寺ニ少造作参申付而願其儀、導師へ参候もの一色も取不来、真光寺仏前之道具ニ被仕候得と被申、皆具出し被申候。

一 上様衆竹嶋大炊と申仁、但知行五百石、慶長十八年霜月（武嶋茂幸）（17ウ）二日死去被仕候時、浄嚴院先住真光寺ニ而焼

香被仕候。此時師檀被申候様ハ、先年助三郎時のことくに導師へあかり候物、皆具給候得と色々申候得共、広譽被申候分ニ者、助三郎死去之時之様子ハ、最前法問出入之時真光寺へ造作かけ申候故ニ皆具出し候得共、此度之儀者出し申事不罷成とて、合点不被致候。此様子にて師檀被致不足、本寺へ不通ニ罷成候。此方より曾末寺をは捨不申候事。

【六】 浄嚴院組頭衆加判証文三通有事

〔史料⑦〕

○定此如ニあるへく申者也。

一 ○定 当宗所々導場・各庵・寮舎、同被付置候下地・一（18才）校割等、其主之号弟子・親類、少も不可競望候。建立主一期之後者、寺家可為進退候。然上者本寺之儀、其寺之住持談合にて留主可申付候。但主により被申置

候子細候て、一旦被預置候共、法度以下為寺家不可然事候ハ、則退出させられ、誰ニ而も被レ置候而、開基位牌をあかめ、念仏可為肝要候。猶以此儀無同心之人者、号興隆、各寮可為無用候。仍本寺・末寺何も此旨堅定置処如件。

永正十二年乙亥十月十六日

宗真判(18ウ)

臨西敬恩寺  
宗真上人没後焼香ノ事  
是ヨリ四丁メニアリ

淨阿判阿弥陀寺  
始世也

周般是本寺之寺僧  
本寺ノ僧兩人ニ限事可知

真誓判是本寺之寺僧

正覺院忍誓真源上人也。坊ノ五世トナル

宗珍判信樂院  
内池根取院ヲ開基ス  
映誓上人也。坊ノ四世トナル

〔史料⑧〕

定 当会下及末代、如法度文、諸事可然様仁堅談合候て、本寺・末寺可有守護之儀、尤可為專要候。為其各被加判形候上者、無異儀之様可申合候。縦於此衆中、兎角違背之仁躰候ハ、宗躰可為無興隆者也。」(19才) 此旨依衆議定処如件。

天文肆年九月十三日

忍誓判

宗阿判常樂院

西円判淨光寺

觀阿判常念寺

珠源判九品寺

宗秀判眞取院

壽清判御名寺

源阿判淨善寺

珠榮判弘誓寺

祐真判阿弥陀寺

永源判西願寺

觀誓、二世也

善正判来迎寺

珠慶判正覺院

右御本紙有之。」(19ウ)

〔六号—一〇〇〕

〔史料⑨〕

諸末寺置目之事

一 公方入并加地子等、九月別時以前、先坊主悉被相済、後住之無相違可被相渡事。  
一 校割并古帳等、悉従先坊主校割目錄之面、後住へ可被相渡候。其時自末寺頭請取渡可有之候。但或盗人、或焼失、或取替族於有之者、可為誓紙事。

一 自末寺頭、法度堅可為成敗候。但無承引ハ、本寺へ」(20才)可有注進事。

右此条々於相違仁躰者、及糺明、門徒可被相放事。

永祿十年二月三日

上ノ天文四年ヨリ三十二年後也。

應譽判(明感) 阿彌陀寺四代也

西源判九品寺 常金寺

正覺院判東善寺 弘誓寺

臨西判称名寺 信樂院

善永判常樂院 淨光寺

慶阿判如來堂 淨善寺

宗源判十一

宗慶判十三

林阿判敬恩寺 為五世

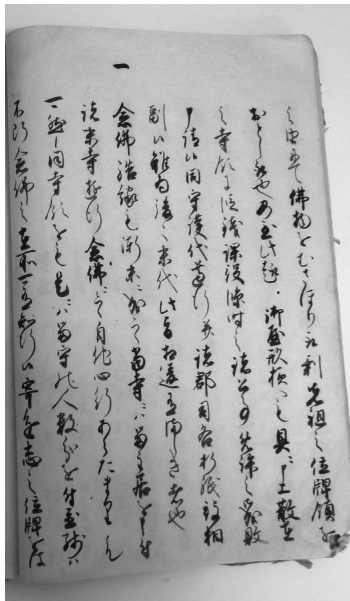
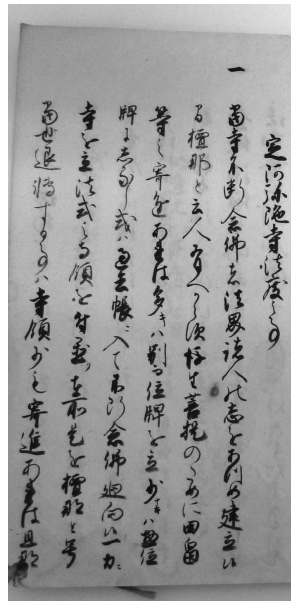
御本紙有之。」(20ウ)

〔六号—一〇〇〕

【七】 阿弥陀寺より両本寺之証文ト申ス書物三通事

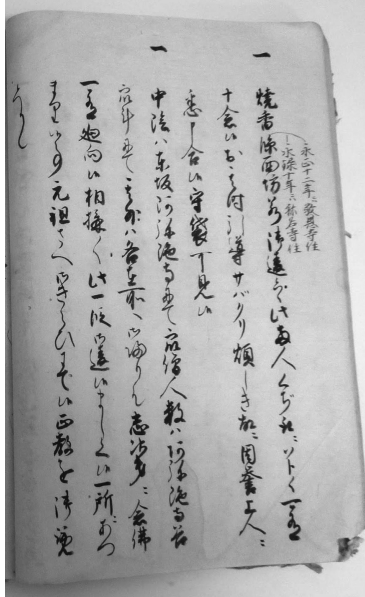
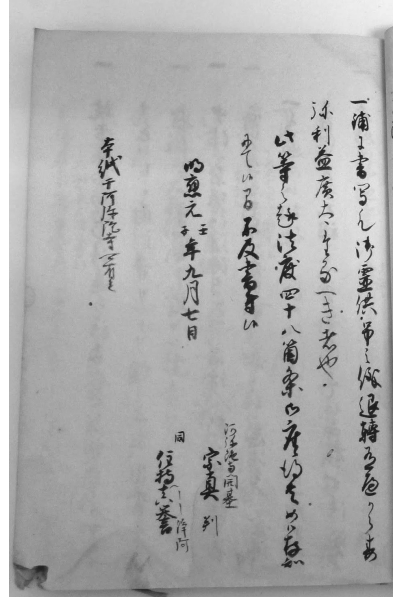
【史料⑩】

定阿弥陀寺法度之事



一 当寺不断念仏者、法界諸人の志をあつめ建立候間、檀那と云人有へからす。後生菩提のために田畠等之寄進あれば、多キハ別而位牌を立、少ナキハ惣位牌にするし、或ハ過去帳二入て不断念仏廻向候。一力二寺を立、法式之寺領を付置ク在所、是を檀那と号。当世退轉する事ハ、寺領少も寄進あれば、旦那（21才）之由にて仏物をむさほり取、剩先祖之位牌領をおとし取也。乃至此趣 （六角高懸） 御屋形様へも具二申上、散在之寺領に段銭課役・臨時之諸公事免除之御成敗申請候。同守護代遵行并諸郡司各折紙被相副候。雖為後々末代、此旨相違有ましき者也。

一念仏結縁も漸末二成候ハ、当寺二ハ留守居を申付。諸末寺遊行念仏二候ハ、自他心行あらたまり候て可然候。同寺領をも是二ハ留守の人數分を付置、残ハ不断念仏之在所可有知行候。寄進志之位牌をは（21ウ）



一鋪に書写候て、御靈供・吊之儀退転あるへからす。  
弥利益広太たるへき者也。

此等之趣、法度四十八箇条御座候得共、如御存知  
にて候間、不及書付候。

明応元年壬子九月七日

阿弥陀寺開基  
宗真 判  
住持真譽

本紙于阿弥陀寺可有之。」(22才)

〔史料①〕

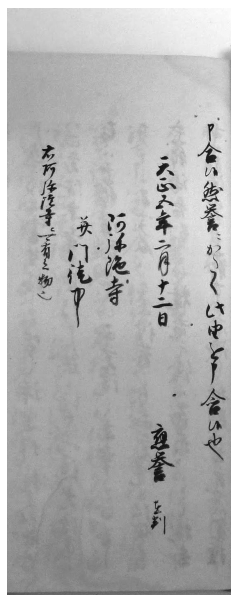
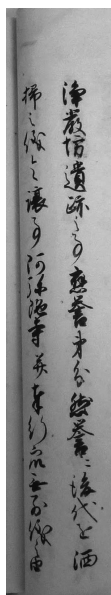
永正十二年二敬徳寺住  
永祿十年二八條名等住

一焼香臨西坊、若御違候ハ、此両人くぢ取ニソトク可  
有十念候。於其時引導サバクリ煩しき故二周珠琳上上人二  
悉申合候守袋可見候。

一中陰ハ東坂阿弥陀寺にて、衆僧人数ハ阿弥陀寺・谷衆  
斗にて、其外ハ各在所へ御歸り候て、志次第二念仏可  
有廻向候。相構く此一段御違候ましく候。一所二あつ  
まり候事、元祖法然さへおきらひにて候。正教を御覧候へ  
く候。」(22ウ)

一 東坂の弥陀寺ハ浄の弥陀佛ハ入の法末寺ハ弥陀  
 不斷相續候様ニ真実仏前・興隆忠功・外聞実儀可然候。  
 下候。  
 一 谷ニハ宗珠坊<sup>宗正十二年御宗院住  
山四代</sup>わたり候て、東坂と万事談合候て、宗牀  
 法度以下并念仏化導可有益候。  
 一 黒箱 大殿様給候。是をハ焼香候はんする人にまいら  
 せ候。  
 一 作善ハ有相に候はん。とかく公界氣遣名利・仁儀かま  
 しき事、人々の工さへきらひわひ候き。念仏」(23才)  
 惣グリ御廻向可為本望候。

惣グリ御廻向可為本望候。  
 一 南寮ニハ真誓坊候て、此旨不相替、諸事御本尊へ可有  
 忠功候。一期住山候へく候。  
 永正十年二月二日  
 宗真判  
 右阿弥陀寺ニ可有之物也



〔史料⑫〕

浄嚴坊遺跡之事、應譽弟分然譽二、後代を洒掃之儀、令讓事、阿弥陀寺并奉行衆無別儀之由（24ウ）申合候。然譽二かたく此由を申合候也。

天正五年二月十二日  
（明感）  
應譽 在判

阿弥陀寺

并門徒中

右阿弥陀寺二可有之物也。



〔付録〕別時法度（浄嚴院藏）（28・2<sub>チセン</sub>×128・2<sub>チセン</sub>）

定 別時法度之事

一 開白の前に行水を可被用事。

一 僧堂の十念の時、末座まで同音に高声に可被唱事。

一 調声人の征鼓とたかさひきさまておなし様二可被打。脇金よりちかひやう。をうち、心々に不可有事。

一 打延の念仏にハ礼堂と僧堂と論義に可被申。礼堂に人なくハ、仏前の北南わかちて、申さるへき事。

一 入道場ありて、指当急用なきに座はゐをあけらるへからさる事。

一 於内陣、隣座と雑談あるへからさる事。

一 時相にこ、かしこにて邪教雑談・高わらいあるへからさる事。

一 きやうしやく・すゝをふり候はん二、腹立あらハ、導場を可被出。但役者ハ慈悲ありておこさるへし。邪興の心

ありて、事を左右によせ、すいめんながらんにことくくしくせられハ、一老へ可有注進。私に諍論不可叶事。

一 入道場の時、必ず御本尊へ一礼あるへき事。

一 調声人脇金よ所を不可見。本尊二向てあるへき事。

一 しやくひやうし、一人打にならへて、うつへからさる事。

一 開白・結願ニハ、わきかねハ大方寺より同道の中にあるへき事。

一 阿弥陀経の時、導師の調子を聞つくるいて、文字をたしかによまるへし。心々に経をよみやふる人あらハ、手水

を用、導場を出さるへき事。

一 僧堂過てゑん二てやうしを能々仕て、手水を用、導場へ入らるへし。僧堂にて長やうしつかふへからさる事。

一別時二ハ、各々かみそりをもつへき事。

一念珠・袈裟・扇、其外何二ても取ちかへ候ハ、いそぎ主をたつねて返さるへし。若主なくハ、僧堂の口にかけて並へし。左様に候ハて、取籠候はんするを、余所より見付候ハ、則導場を出さるへき事。

一聴衆の物とおほへ候て、落置事候ハ、礼堂にかけて並へし。さたなくくしをく人候ハ、同前罪科たるへき事。一庫裏ハ知事、僧堂ハ奉行の役として、細々火事・盗人の用心可有成敗事。

右条々依衆儀議所定如件。

# 註

(1) 『浄土宗全書』第十七卷六一六頁。

(2) 伊藤唯眞「一般寺院の成立事情―近江の場合―」(伊藤唯眞著作集Ⅱ『聖仏教史の研究』下、法蔵館、一九九五)、同「浄土宗近世教団の胎動」(同著作集『浄土宗史の研究』、法蔵館、一九九六)など。

(3) 中井真孝「知恩院の京都門中について」(同『法然伝と浄土宗史の研究』、思文閣出版、一九九四)。同書第三篇第一章「浄土宗の本末関係」でも関説している。

(4) 南尊融「本末制度確立過程における自伝の改竄―所謂「阿弥陀寺本末圖」諸寺院の場合―」(『佛教大学仏教学会紀要』一二号、二〇〇四)。

(5) 中井真孝監修『知恩院史料 近世文書篇Ⅰ』(知恩院史料編纂所編、二〇一七)。

(6) 滋賀県教育委員会『總見寺文書2・浄厳院文書』(安土城・織田信長関連文書調査報告四、一九九五)。安土町教育委員会『浄厳院資料総合調査報告書Ⅰ』(安土町教育委員会、二〇〇五)。

- (7) 伊藤唯眞「知恩院周營珠琳と浄厳坊宗真―珠琳の一書状をめぐる―」(同『浄土宗史の研究』)。
- (8) 滋賀県編『滋賀県史 第五卷 参照史料』二七一頁(滋賀県、一九二八)。
- (9) 藤本了泰「中世浄土宗の諸掟について」(『鴨台史報』第五輯、一九三七)。
- (10) 伊藤唯眞註7論文。
- (11) 『滋賀県指定有形文化財浄厳院楼門修理工事報告書』(滋賀県、一九九七)。
- (12) 『知恩院史料集 日鑑・書翰篇二〇』(知恩院史料編纂所、二〇〇五)。
- (13) 浄厳院蔵。
- (14) 前掲安土町教育委員会報告書に写真が掲載されている。筆者作成の釈文も付いているが、少々読みが間違っている。